

五輪に異論 避ける空気



写真は朝日新聞5月3日「通わぬ言葉」。名古屋で教員生活を始めた頃、名古屋五輪誘致に反対する運動に関心を寄せた。水田洋先生らと『反オリンピック宣言』というタイトルの本を地元の出版社から出版した。愛知万博にも辛口の論陣を張った。そして今、大阪万博についても積極的に発言しつつある。最近とくに「異論 避ける空気」を感じるので、抜粋して紹介したい。

つくりあげた作品に「不快な表現がある」と指摘され、内容の変更を求められた映像作家の吉開菜央さん(31)。東京五輪を前に、高まる機運を損なってはいけない。そんな自粛の空気が広がっていると感じる。

意見を述べたら、思わぬ反応が待っていた。元ラグビー日本代表で大学教員の平尾剛さん(44)は各地の講演で、東京五輪に反対する立場から発言を続けている。

2017年11月、スポーツの面白さを語るネットのコラムで反対を訴えた。招致に絡む買収疑惑が報じられ、新国立競技場建設をめぐる住民や野宿者が立ち退きを迫られていた。「そこまでしてする大会なのか」と考えた。「反対」と言うことは、大会の成功や出場を夢見る先輩後輩への裏切り行為ではないかと悩んだ。しかし自分が思うスポーツの本質は、仲間づくりや思い通りに体が動いたという喜び。巨額の金が動き、政治的な思惑が見え隠れする五輪のあり方に違和感を抑えられなかった。

ネットでは「ようやくスポーツ界から声が上がった」「アスリートなのに水を差すな」など、賛否いずれの反響もあった。コラムを紹介したツイートは1千件以上の「いいね」がついた。ところが、予想していたスポーツ関係者からの反発は不思議なほどない。ラグビーの仲間に話を振っても、笑ってごまかされる。まるで腫れ物に触るかのようだ。「葛藤するアスリートが増えないと信頼を失い、スポーツの裾野が狭まりかねない」。当事者であるスポーツ界から議論が生まれず、現状を危ぶんでいる。

都内で絵を描くワークショップや路上パフォーマンスなどの活動をしているアーティストのいちむらみさこさん(47)は16年夏、「暮らしとアート」をテーマにした講演会に出演する際、プロフィールから「反オリンピック」という一文を削ってはどうかと提案され、面食らった。過去の五輪でも野宿者の立ち退き問題があったとして、招致段階から反対運動を続けてきた。それに対し、講演会の主催者と共催する都の関連団体の中で「反対の立場の人がいると、『推進する側がなぜそんなゲストを呼ぶのか』と批判される恐れがあるのでは」と問題になったのだという。いちむらさんは、「そんな理由で、信条を表明できないのはおかしい」と断った。最終的に、トラブルが起きた場合は責任を取ると主催者が引き取り、プロフィールを残す形で決着した。当日はパラリンピックに賛成するアーティストも一緒に登壇し、五輪への思いを話した。異なる意見が交わされ、終了後、聞いていた人から話しかけられた。よかった、と思っている。

(2019年5月7日)